

# 『三千里』と『青丘』の二十年

金 達 寿 (作家)

姜 在 彦 (花園大学教授)

李 進 熙 (和光大学教授)

## 文化事業を支える

李 『青丘』もおなじ姿勢で貫いていますが、五十号を節目として『三千里』は終刊にした。そのときオーナーである徐彩源さんと、少し休んでから若い世代が前面にでる形で後継誌をつくろうと話した。終刊の言葉に「幸いなことに隣国を正しく見ようとする人や若い研究者が年ごとに増えてきました。また二・三世たちの声も着実に高まっています。相互理解を深めるための架け橋は、彼らによって強固に築かれるでしょう」と書いたのは、徐さんとの話ができていたからです。ところが終刊号まもなく心臓マヒで亡くなられてしまった。

その後現在のオーナー韓昌祐氏とめぐり合い『青丘』を創刊しますが、雑誌づくりは七・四共同声明の精神を継承して、二・三世にバトンタッチする方針で二〇号まできました。

金 徐彩源さんは本当に偉かった。亡くなったから言うわけではなく本当に惜しい人を亡くしたとくやまれます。

雑誌づくりは理解ある実業家があって、はじめて支えてもらえるのであって、飯沼さんがある所で、「在日朝鮮人は金をもうけて欲しい、そうして文化というものが始まるんだ」と書いているけど、その通りですよ。

そういう意味では徐さんは実業家として広島で学校を建てたり、総連の中央委員までしてずいぶん尽くしたわけでしょう。『三千里』を創刊してからは、かなりの赤字だったにもかかわらず、愚痴をこぼすこともなく、むしろわれわれを激励してくれた。いま考えてもとても大きい偉い人だったと思いますね。こういう人がいないとね、これからの若い人の文化運動は難しいですよ。

李 その意味では援助を惜まない韓昌祐氏には感謝しなければなりません。

『三千里』から『青丘』二十号までの間をふりかえってみると、社会主義体制が崩壊し、民俗エゴイズムが前面に出始めたでしょう。こうした価値観の大きく変わっていく時代に、

祖国や統一、在日という問題をたえず念頭に置きながら、雑誌をつくってきた。短絡的に言えば、『三千里』時代はわれわれ在日が中心となって議論することが多かったけど、『青丘』の特徴と言うのは、在日朝鮮人問題を日本人が自分たちの問題として考え、積極的にかわわってくれたことでしょう。それから在日二・三世の執筆者が増えてきたのも大きな変化といえます。

姜 本場に今昔の感がありますよ。『三千里』創刊時は日本人に朝鮮問題を書いてもらえる筆者は指を折って教えられるくらいしかなかった。誌面を埋めるために編集委員が何本か連載したでしょう。それが『三千里』五十号になると、多くの日本人と在日の若い執筆者が出ています。これをひき継いだ『青丘』はさらにバラエティにとんだ執筆陣で、しかもいろんな角度から切り込んでいる。まったく今昔の感を持ちますね。

李 雑誌は金食い虫ですが、号を重ねる中で、それが大きな力になり、われわれの生きた二十世紀末の時代の記録、在日の記録として残すことができる。そういう意味で徐さんや韓さんの業績は大変なものだといえますね。

姜 韓昌祐氏は、事業で得た利益の一部を日韓友好と在日同胞のために還元しようという考え方で、同胞実業家としてもかつてみられなかった新しいタイプでしょう。これはわれわれにとつて心強いことだし、若い人たちに希望をあたえてくれる。つまり日本の雑誌などに書く機会もあるけど、それは日本人がつくった舞台に乗ることであって、在日が舞台をつくって日本人とともに考える。そういううすばらしい場をつくるためには資金が必要であって、つまり事業で得た利益を社会に還元するという実業家が出ないかぎり不可能ですよ。

金 われわれは個人個人では弱いんだな。李さんは考古学でしょう。姜さんは近・現代史、ぼくは作家、みんなバラバラなんだ。これを結集できるのは、徐彩源氏や韓昌祐氏といった志のある実業家なんですよ。